

これを地獄という

今朝、マルコによる福音書がわたしたちに告げる出来事は、さまざまなレベルでわたしたちの生きる社会の悲惨、世界の歪みを映し出しています。本当に恐ろしいことですが、この出来事の結末で、一人の人間が救われたことを喜ぶことが出来ずに、その地方から出て行ってほしいと主イエスに頼んだ人々の姿は、そういう立場に置かれたならば自分もそのように申し出るのではないかということを含めて、わたしの問題として、自分中心にしか生きられない人間の姿をあぶり出しているように思うのです。「これを地獄という」という本日の説教題は、全体の救いを視野に入れることが出来ず、わかちあいとゆずりあいとまなびあいに生きることの出来ないわたしたちの姿を指しています。主の祈りをいのる時、わたしたちはいつも「我らの父よ」と呼びかけ、「我ら」を単位としてこの祈りの願いを差し出します。しかし、問題はこの「我ら」がイエス様においては全体、そう、100匹の羊を持っている人がいて1匹を見失ったとしたら、99匹を野原においていなくなった1匹をどこまでも探しに行き、見つけ出して連れ帰る。そのような羊のために命を捨てる良い羊飼いとしてみな自身を表された。ひとりも欠けることは神の御心ではなく、100%、トータルにわたしたちを救おうとされる決意をもって臨んでおられるのがイエス・キリストです。すべての人の救い主。民族も、性別も、年齢も、身分も関係ない。ひとしく神の憐れみのもとにある羊として連れ帰ってくださる。イエス様が教えられた「我らの父」である神は、そのように決意されて、独り子であるイエスをお遣わしになった。ですから、主の祈りのなかでわたしたちが祈る「我ら」とは自分の仲間内や、利益集団や、同族、同じ国民ということの意味しない。文

字通り我ら人類すべて、100%を指している。しかし、現実には、この祈りをいのるとき、わたしたちはそうではない。わたしたちとわたしたちの外、わたしの知っている誰かまで、知らない人のことまで「我ら」のなかに入ってこない。だから、仲間内のことは守ってほしいし、そのレベルにおいて、日毎の糧を求め、日毎の赦しを求め、祈るのですが、このゲラサの悪霊追放で示されたように、交わりから絶たれて墓場に住んでいた男、そのうちにレギオン、ローマの千人単位の軍団を意味するほど大量の悪霊を宿し、自傷行為に走り、訳の分からないことを喚き、人々から遠ざけられていた男を、イエス・キリストが救われた時、その結果を、人々は喜ばなかった。それは確かに恐ろしい光景だったでしょう。悪霊の願いを聞き入れて、豚のなかに入ることを許可した結果、2千頭もの豚が悲鳴をあげながら崖をめがけて突進し、次々と湖に雪崩をうって墜落し、溺れ死んだ。豚飼いの話を聞いてやってきた人々は湖の岸近くの水面を埋め尽くす2千匹の豚の死骸をみて絶句したことは間違いないでしょう。みれば悪霊つきの男、村の噂になっていただろう男が正気に戻っているのも見た。しかし、そこで喜ぶよりも恐れた。この恐れは複雑で、ちょうどペテロがイエスさまのお言葉に従った結果、舟を埋め尽くすほどの魚がとれて沈みそうになり、わたしを離れてください。わたしは罪深い者なのです、と告白したように。わたしたちのなかに救う悪のすがたを豚2千頭の死骸のかたちで見せつけられた時、それはあまりに恐ろしかった。直視することはできかねた。そこでキリストにその地方から出て行ってほしいと願った。またもう少し今日風の言い方をすると、治療費が高すぎると思われた。レギオンに取り憑かれていた男が正気に戻るのに豚2千頭のコストがかかった。これはそういうことでしょう。むかし畜産関係の人に聞いたこ

とがあるのですが豚一頭が3万円くらいで買えるとして、それが2千匹ですから、6千万円です。難病で苦しんでいる人を外国に手術にいかせてあげたいというクラウドファンディングというか、寄付のようなことは昔からありましたが、それにしても6千万とは安い金額ではありません。「我ら」に属するひとりが正気に戻るとしても、自分が様々に使えるお金をだすことはなかなか踏み切れない。自分の命、自分のしたいことと天秤にかけてわたしたちは判断するでしょう。全体の救いよりも、自分の救い、自分の半径数メートルの範囲でしか事柄をはかれない、わたしたちの問題性が表れてしまう。一人の人の回復を全体で喜ぶことが出来ないで、コストがかかりすぎとか、わたしには関係ないとか、放っておけばいいのに、というコメントが現代でも出るのはい間違いのないと思われるゆえに、このゲラサの悪霊追放の出来事は極めてリアルで、古びていないのです。ただ、わたしは今回の説教題を「これを地獄という」というものにしてしまいましたが、そちらを描写することに力を入れすぎるのは考えものですね。説教の準備をしながらあらためてそう強く感じました。わたしたちの側の悲惨をあげて、こんなにダメだといっても始まらない。もちろん、現状の認識は必要だと思いますから、その範囲のなかで人間の罪や、それが生み出すさまざまに心の通わない状況を指摘はしますが、本当に大切なことは、その只中に来て下さるキリスト・イエスを指し示すことです。我らの救い主を褒め称えることです。このゲラサの悪霊追放の出来事はマルコによる福音書5章に記されています。福音書が記している悪霊追放の記事のなかでもっとも詳しく記されている出来事です。そして全体で16章あるマルコ福音書のなかで、イエスさまがガリラヤで伝道活動を始められた比較的初期のエピソードとして取り上げられています。そう思って

あらためてこの出来事を見ます時に、教えられますことは、まずこのガリラヤという地方、エルサレムからみれば北の方にあたるこの地域は「異邦人のガリラヤ」とユダヤでは呼ばれたように、イスラエルの北王国を滅ぼしたアッシリア帝国の侵略をまっさきに受けた地域にあたるのです。その結果、アッシリアの鉢植え政策によって住民の混血化が進みました。北王国の首都であったサマリアが住民の混血化が進んだことによって、後の時代のユダヤ人たちから祭儀的には清浄ではなくなったと判断され、避けられたように、異邦人のガリラヤと呼ばれた、いうならばユダヤの中で失われた一匹の羊となってしまったその地方で、主イエスは「時は満ちた。神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と声をあげられたのです。そして、さらにその救いの働きは湖の向こう岸にも及んでゆく。イエス様の時代までには、セレウコス朝シリアによってギリシア文化がこの地域に入ってくる。実際に湖の向こう側のゲラサ地方は豚を飼い始めている。聖地旅行に行かせていただいた時、イスラエルに入ったらホテルの朝食にベーコンがなかったですね。ああ、なるほどと思いました。旧約聖書最後の時代あたりに、シリアのアンティコス・エピファネスによって神殿にささげものに豚の血が混ぜられたことによって暴動が起きたという事件もあるのです。そういう豚を飼っている地域に、イエス様は進まれる。向こう岸に渡ろうと仰って、舟を出される。そのまなざしはすべての地域に向けられています。この方の行かれるところから漏れる地はない。しかも虐げられ、辱められ、見捨てられた一匹から、この方の救いは始まる。そのことをゲラサにおける悪霊の追放は示しているのです。そして、またこの出来事はわたしたちに贖いということの尊さを教えてくれる出来事でもあります。このゲラサにおける悪霊に憑かれた男を癒される

のには豚 2 千頭の犠牲が必要でした。ならば見失われた一匹が見出されたことを喜ぶことが出来なかった 99 匹をも含めた全体の救いのためには、どれほどの犠牲が必要だったでしょうか。このことに思いを巡らす時、このゲラサにおける悪霊追放の出来事はエルサレムにおける主イエス・キリストの十字架の死を先取りした出来事としてわたしたちに迫ってまいります。そして、わたしたちの慰めは、この覚悟をもって、わたしたちに向かい合われる主イエスの引くことのない愛を知ることにあります。先へ、先へ、失われた者のところに先立って進まれる主イエスの姿に神の愛があります。そこから、わたしたちは励ましを頂いて、新しい歩みへと送り出されます。

お祈りをいたします。